

1967(昭42)年日本体育協会は、国民体育大会の開催順位を決めるルールを設定。全国を東・中・西の3ブロックに区分して、ブロック内で順序をつける方式を策定した。

奈良は中ブロックの中部、近畿、中国地方の中に所属し、体育協会は3年に一度回ってくる開催順に誘致の手を挙げて、他の府県と開催を競った。

県では県民が身近にスポーツができる施設を設置するために、希望する市町村から一万平方メートル以上の空き地の提供を呼びかけ、県が整地した後は市町村が管理するユニークな政策をスタートさせた。

国体こぼれ小話 (市町村に健民運動場を設置)

66(昭41)年に田原本町に第一号の運動場が完成、その名を「田原本町健民運動場」と命名した。その後県内25市町村26カ所に、健民運動場が建設され、町民の貴重な運動の広場として活用されてき

スポーツが日常の中に

た。

時代の変化で、健民運動場は発展した町村一等地となつて一部移設されたところもあるが、今もグラウンドは町村民の身近なスポーツの拠点になっている。

県体育協会は、県の政策を軸に、中プロッ

クで開催が予定される30回国体(75年)に臨んだ。誘致に声を上げたのは長野、三重、滋賀、奈良の四県。結局開催を勝ち取ったのは三重県。私も誘致運動には積極的に関わったが、奈良の力は及ばな

で、開会式の前日、宿泊施設の夕食で食中毒が発生。全国から参加した都道府県役員の多くが病院に隔離された。私もその中において四日間外出禁止、解放されたのは閉会式の日だった。結局選手の活

かった。

不思議な縁で私はこの三重国体開催の年に、長年勤めた小、中、高校の教員から離れて、県教育委員会に移

動、国体など社会体育の振興に関わる仕事をする事になった。

75年9月、夏季国体が開催された四日市

躍を見ることもなく大会は終わったという苦しい体験を思い出す。

東京オリンピックの開催から10年たつて、国民のスポーツへの関心は高まり、日常生活の中にスポーツを取り入れる人々が増えてきた。県はしばらく国体

誘致には関わることなく、地道に県民のスポーツへの関心を高めることに力を注いだ。家庭婦人バレーボール、トリム体操や、高齢者のゲートボールの普及などに取り組んだ。県民が身近にスポーツが

できる施設として市町村の学校施設が使用できるように、学校施設の使用条例を改定するなどにも取り組み、社会体育の振興を図った。従来学校で学ぶことが中心であった運動、スポーツが、高齢



県が整地し市町村が管理する運動場の第1号となった田原本健民運動場。田原本町西井上

者や家庭婦人の間に広がりが発展した。県及び県体育協会はしばらく国体から離れ、県民の身近なスポーツ振興、健康増進のための運動の奨励に努めていた。

77年日本体育協会から県体育協会に対して、次回39回国体(84年)開催への打診があり、県及び体育協会はこれを受け入れて、「わかくさ国体」の開催を決めた。「駆けよ大和路、はたけ未来」をスローガンに、県民挙げて臨んだ「わかくさ国体」は大成功裡に終わった。

県では2031年に再び迎える第85回国民スポーツ大会開催に向かって本年3月、奈良県スポーツ推進計画を策定。着々と準備が進められている。

第2、4金曜日掲載予定